

城下町新発田にみる新発田川

◆新発田川があつてこそ

新発田のまちと新発田川は深い関係にある。江戸時代、新発田は溝口侯の城下町であり、まちは溝口侯の居城であった新発田城を中心にして発達してきた。その新発田城は、新発田川あつてこそその城であり、城下町新発田の生活を支えたのは新発田川であった。

溝口藩初代の秀勝侯が豊臣政権の命令で新発田に入封したのは、慶長三年（一五九八）のことである。戦国末期、新発田には新発田氏の居城があり、溝口侯は、この地に居城を構えるのが最適と考え、築城を行った。

新発田を城地として選んだ理由については、次のように考えられている。

- ・ 地形的にこの地が新発田川の形成した広い砂礫土層の三角洲上にあり、北部に加治川を控えて防衛に便利である。
- ・ これらの水系を利用すれば水運に便利であり、日本海との連絡も容易である。
- ・ その城下町は、阿賀北地方の雄将重家の城下町であり、他の地に比べて発達していた。

◆コラム「新発田市の市章」

市章は、新発田藩歴代藩主溝口家の家紋、五階菱である。



◆城下町の都市計画をみる

築城に際しては、新発田川を人工的に河道を変え、城下町の防衛線に取り入れ、その境に新発田川を流した。また、濠の水は、寺町託明寺脇から新発田川の水を取り入れて外濠・内濠に利用した。新発田城の石垣は「古寺石」と呼ばれるもので、新発田市古寺から新発田川を通り、舟で運んできたものである。

その後、城下町の発展は、元和七年（一六二一）ころから新発田川を越えて新町が建設され、さらに南西方向に商人や職人の町が拡張されて、新発田川は現在のようなほぼ市街地の中央を縦貫する形になった。

このように新発田川は、新発田城の防御を主とした川として造成されたが、城下町の生活・産業・経済等にも大いに貢献した川である。



「江戸時代400年記念 城下町新発田400年のあゆみ」新発田市より作図
新発田城城郭図（江戸末期）

◆コラム「新発田城の別名」

新発田城には、浮舟城、あやめ城、狐の尾引城といった別名がつけられている。

浮舟城

万一籠城戦となったときは、城の北に流れる加治川の堤防を切って城の廻りを水浸しにして敵から守れるように設計されていたため

あやめ城

周囲に湿地が多く菖蒲（あやめ）がたくさん咲いていたため

狐の尾引城

築城を命ぜられた長井清左衛門が縄張り（平面设计）に苦心しているとき、日頃信仰している稲荷の使いの狐が枕辺に立ち、白雪の上に尾で図を示して教えたという伝説があるため



新発田城とアヤメ